

本邦初の公立結核療養所から100年、 難治性疾患の専門病院として

独立行政法人国立病院機構 刀根山病院（大阪府豊中市）院長 **奥村明之進**



刀根山病院は昨年100周年を迎えられたそうですが、その歴史を教えてください。

1917年（大正6年）9月に本邦初の公立の結核療養所「大阪市立刀根山療養所」として開設された刀根山病院は、昭和40年代までは1000床以上の病床を有する屈指の結核療養施設でした。その後結核が沈静化するとともに、呼吸器診療全般として神経・筋疾患、整形外科などの難治性疾患の専門的診療も加え、100年の歴史を重ねています。2018年4月より院長に就任された奥村院長に、お話を伺いました。

奥村院長は今年3月までは大阪大学におられたのですか。

奥村 3月31日まで大阪大学大学院医学系研究科の呼吸器外科学の教授として呼吸器外科の臨床の実務と研究および指導にあたりておりました。専門分野は、肺癌・転移性肺腫瘍・縦隔腫瘍などの悪性腫瘍に対する外科治療で、早期癌に対する胸腔鏡手術から進行癌に対する拡大手術まで行ってきました。他にも重症筋無力症に対する胸腺摘出術と免疫抑制療法などの薬物療法、呼吸不全に対する肺移植などの専門的診療も行ってきました。

奥村 当院は1917年に開設された大阪市立刀根山療養所が始まりです。その後1929年に大阪市立刀根山病院と名称変更、1947年には国立療養所刀根山病院に、そして2004年、国立病院機構刀根山病院になりました。1968年（昭和43年）が最も病床数も多く、1120床の病床を有する日本最大級の結核療養所でした。その後結核患者さんは減ってきていますので、徐々に結核病棟は縮小されてきました。

結核治療と結核研究の拠点として 100年の歴史を刻む

結核は薬で抑えられるようになる前は大変な病気でしたから、ここでは基礎研究も随分行われていました。非常に有名な免疫学者で、大阪大学の旧第三内科の教授をされていた山村雄一先生も若い時にこの刀根山病院におられて、研究所も併設されていたので、結核の基礎研究の実績を出しておられます。研究成果は結核だけでなく免疫学の研究にも大きく貢献しました。

結核病棟は薬の発達で縮小している、現在入院している結核患者さんは30人ほどです。結核病棟は築50年

でかなり老朽化していて、本来なら建替えて新しくするところですが、もう需要があまりないことや資金的な問題から、来年以降の結核診療に関しては、新しい方の病棟を少し改修し、一般病床の一部でサイズを小さくして、最低限の形で行っていくことになる予定です。

呼吸器全般に加えて 神経難病と運動器の難病

それ以外には、呼吸器全般の診療を展開していますが、最近増えているのが非結核性抗酸菌症です。またCOPD（肺気腫）や間質性肺炎も高齢化と共に増えています。これらは最終的には慢性呼吸不全になります。しかしCOPDに関してはこの10年の間に非常に優れた吸入薬ができましたし、間質性肺炎に関しては新しい薬が続々とできています。こういった薬を使いながら治療、リハビリ、ケアを行っています。

さらにこの50年で当院では神経難病も診るようになりました。一番多いのが筋ジストロフィーです。呼吸器をサポートしてあげると長期生存が可能になりましたので、在宅療養で人工呼吸器を使いながら治療を行っていくケースが増えてい

ます。そして在宅が難しくなると入院して、医療と介護を合わせた形の治療を受けておられる患者さんが約80人いらっしゃいます。人工呼吸器

の管理、入浴、食事すべてに介助が必要で

神経難病で似ているのがALSです。やはり人工呼吸器管理と全身ケアが必要な患者さんたちです。またパーキンソン病も多いです。薬物治療が出来ている間はいいのですが、高齢になるとうまくいかなくなり、「すくみ足」というような独特の症状が出てきます。食生活や睡眠などから治療法を考えていきます。佐古田前院長のご専門で、光線によって生活のリズムを整えるといった療法などもあります。

さらに神経疾患と呼吸器疾患の境界領域的な疾患として睡眠障害があります。SASが代表的ですが、他にもむずむず脚症候群やレストレスレッグズ症候群、レム睡眠行動障害などがあります。

病院内だけでなく 在宅医療でも 非常時の対策が必要

在宅で在宅酸素療法をしていたり、人工呼吸管理をされておられる患者さんが当院には500人くらいおられます。状態が悪くなれば一時的に入院して来られます。

先日の台風の時、院内では約100台の人工呼吸器が稼働していましたが、幸い非常電源を用いて問題はありませんでした。ところが在宅の人工呼吸器の患者さんの家は、バッテリーが上がりがそうになり、30人くらいが救急車などで病院に連れて来られました。病室はいっぱいで、外来やホールなどで停電が回復するまで、しのいでいただきました。無事に対応できて良かったと思

いました。直後に北海道ではブラックアウトが起きて大変でした。こういった時にどう乗り切るか、考えておかなければならないと痛感しま

した。患者さんのトリアージが必要で

手術前の口腔ケア
高齢者の肺炎を防ぐ
もちろん肺がんの手術も多く、年間120〜130例、さらに呼吸器の手術全体では250〜260例くらいあります。最近では肺がんの初期は殆ど胸腔鏡手術です。術後が非常に楽になったと思います。

また高齢者が増えているので肺炎が多いのですが、唾液や鼻漏が気管支に入る術後肺炎です。口腔内の清潔と手術前の口腔ケアを重視しています。歯科の先生方に毎日来てもらい、口の中を清潔にして手術に臨んでいただくようにしています。術後の肺炎は格段に減りました。

3つ目の大きな診療分野は 運動器の難病を扱う 整形外科

整形外科も専門的診療を加えて進化してきました。結核性脊椎炎や骨関節感染症の外科的治療に積極的に取り組み、良い成績を出しています。骨関節結核の手術症例は多くはありますが、手術を施行できる施設は近畿圏内全体でも限られており、外科治療が必要な患者さん達が遠方からも来院されています。

もう一つは慢性関節リウマチです。手術以外の薬物治療も含め、高度な医療を行っています。この10年で治療がかなり進歩しました。免疫に対する生物学的製剤ができて、薬だけでなくかなり良くなるようになってきました。整形外科の先生が薬物治療を行い、その限界が来た時には手術をします。内科的治療から外科的治療まで一貫して行えるのが当院のメリットです。

内視鏡の一種である関節鏡を使った手術も先進的です。また椎間板ヘルニアなどの手術も内視鏡を使って行います。切らずに行う「内視鏡下の椎間板ヘルニア切除術」は、今、非常に注目されています。

医療内容が随分変わってきているのですか。周知活動も必要ですね。病連携や病診連携は？

奥村 豊中市には19の病院がありますが、その中で公的病院は2つなので、特に病診連携が重要です。また調剤薬局との連携を進めています。調剤薬局と病院薬剤部を通信でつなぎ、処方箋の不備等は医師を通じて直接修正できますし、残薬の計算をして無駄な薬を出さないようにしています。医療費削減につながります。豊中の薬剤師会との連携がうまくいっています。地域の病院として信頼される病院を目指し、医療人の育成、地域のネットワーク形成などにも貢献していきたいと考えております。

来年の5月16日（木）17日（金）、大阪国際会議場で「第36回日本呼吸器外科学術集会」が開催されます。テーマは「技術革新時代の呼吸器外科学」で、会長を務めさせていただきます。御参加いただければ幸いです。

- ◆奥村 明之進(めいのしん)プロフィール
- 1984 大阪大学医学部卒業 同附属病院第一外科研修医
- 1993 米セントルイス・ワシントン大学病理学教室
- ハワード・ヒューズ医学研究所研究員
- 2005 大阪大学大学院医学系研究科外科学講座助教授
- 2007 同呼吸器外科学教授
- 2018 刀根山病院院長
- ヨーロッパの呼吸器外科学会において最優秀賞を受賞